

東日本大震災により福島県で被災した本山晃洋さん(58)と仁子さん(55)夫妻が6月23日、避難先の新潟県妙高市から本願寺に参拝し、帰敬式を受式した。自宅は福島第1原発から半径20キロ圏内の警戒区域。福島県外への避難生活という状況の中で晃洋さんは、警戒区域内の遺体捜索や瓦礫の撤去作業などに従事している。本山さん夫妻は今秋、大遠忌法要への参拝を予定していたが、復興工事の本格化が予想されることから、予定を早めて本願寺に参拝したという。困難と向き合いながら、福島の復興を思う本山さん夫妻の足どりからは、大震災の衝撃と復興の困難さ、収束が見えない原発事故への不安などさまざまな問題が見えてくる。現地に晃洋さんを訪ね、その日常を追った。

福島 の地に生きる

大震災を体験した門徒の今

<1>

被災から遺体捜索活動へ

本山晃洋さんの自宅（福島県南相馬市原町区鶴合）は、福島第1原発から約18キロ北、原発事故の警戒区域にある。

本山さん夫妻は、同市原町区本町にある常福寺（廣橋敬之住職）の門徒。晃洋さんは建設会社に勤めながら、2人の田畑と養豚業を営む。田畑と豚舎も警戒区域内にあり、視察に行くことすら許されない。仁子さんは、津波で建物ごと流された同市の介護福祉施設に勤務していた。

大震災が起きた3月11日、晃洋さんは建設会社のトラックを運転していた。福島県の沿岸部を南北に走る国道6号線の南相馬市内を走行中に、大きな揺れに襲われた。海から1・5キロほどの場所だった。

「少しでも高い所へ移動しよう」と山側の側道へ迂回した時、同僚が『津波がきた』と無線で叫ぶのを聞いた。国道は津波に襲われ、5分遅ければ命はなかった」と振り返る。

翌12日には、福島第1原発が爆発事故を起こし、半

原発事故で自宅が警戒区域内に 放射能への不安の中、遺体捜索に従事



本山晃洋さん、仁子さん夫妻

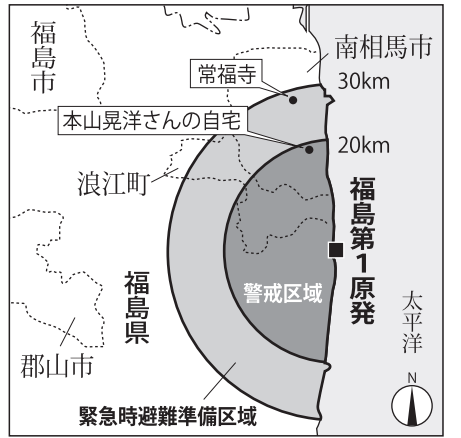
径20キロ圏内の住民に避難指示が出された。この時自宅には、同県双葉郡大熊町から出産のため帰省していた娘の恵子さん(30)と生まれたばかりの瑠信くん(1カ月)が居た。

晃洋さんは、恵子さんと瑠信くんを連れて、同市内で避難指示が出ていない妻の姉の家に2日間待機し、次の避難場所を探した。「自宅を出たときは、2、3日で原発事故が終息し帰れると考えていた」と話す晃洋さん。しかし、自宅に戻れたのは一時帰宅の時だけで、事態が深刻さを増していることがわかった。

「放射能が娘や孫に悪い影響を及ぼす」と、遠く離れた県外の避難所を探し、新潟県妙高市の国立妙高青少年自然の家を見つけた。14日、会津若松市の会津大学で放射線検査を受け、県外避難の許可を得て避難先となる新潟県妙高市へと向かった。

◇ 避難所生活が落ち着いた3月末、晃洋さんの携帯電話に職場の同僚から連絡が入った。「警察や消防に協力して、警戒区域内の瓦礫の中に埋もれている遺体を捜索する仕事に参加しないか」というものだった。

放射能汚染が心配される状況下での作業に加わるか否か、晃洋さんは迷ったという。「自分だけ安全な避難所で仕事をせずに過ごしていることに一種の罪悪感を覚えていたが、放射能は色も臭いもなく、見ることもできない。ベクレルやシーベルトと聞いても実感がわかない中で、連日報道される事故の状態は悪化する



ばかり…。」
考えに考えた末、晃洋さんは決断した。「8000人以上が未だに行方不明。遺体が見つからなければ、葬儀もできない。放射能への不安はあるが、瓦礫の中におられる方を見つけてあげたい」。単身で南相馬市に戻ることにした。

遺体捜索には4月から加わった。現場は警戒区域内の南相馬市小高区の沿岸部。捜索は警察の機動隊、自衛隊、消防、建設会社の組合が協力し行われた。強い余震は30分に一度、いつ再び津波にさらわれるかわからない恐怖と不安の中で作業が続いた。

「防護服での捜索作業は想像以上に暑くて苦しく、過酷なものだった。丸1日作業を行う予定だったが、実際は午前中2時間と午後から2時間ぐらいしかできなかった。特に大量の放射性物質を含むといわれる雨には、強い恐怖を感じた」と振り返る。

困難を極めた作業の中で、「自衛隊、警察、消防の皆さんには本当に感謝している。職務ではあっても、放射能への不安と危険な状況の中に身を置いて、被災地のために働いてくださる姿には涙が出る」と語る。

遺体の捜索作業は、200人から300人が一列になり、山積みとなった瓦礫を重機で少しずつ崩しながら行うローラー作戦。懸命に探しても全く発見できない日もあれば、1日に10体以上見つかる時もあった。遺体は、幼い子どもから老人まで、性別、年齢に関係はなかった。

「遺体を目の前にして、本当に合掌するしかなかった。泥まみれで、時間が経っているのが腐敗が始まっていた。早く見つけてあげられなくて、すまなかったと心の中で叫んだ。いのちのことをこんなに考えたのは初めて」。晃洋さんは涙をこらえながら思いを声にしてくれた。(つづく)



福島第1原発から15キロ北、福島県南相馬市小高地区での遺体捜索の様子（本山晃洋さん提供）